

## \* フェルナン・ゴンサレスの詩<sup>うた</sup> (二)

### 一六 イスラム教徒の捲土重来

作者不詳 岡村 一 訳

トゥールーズの人々は、あるじとともにトゥールーズへ着いた。悲しみに暮れ、途方に暮れるこの人々から離れ、武勲赫々たる伯へ話を戻せば、さらなる悪い知らせが伯の耳にはいつていた——マンスールが強大な軍勢を引き連れ来襲しつつある、鎧兜に身を固めた三万人の家臣がつき従っている、徒武者に至っては数えようとて数えきれまい、これだけの大軍がララ近郊のムニョに集結している——。さきに一敗地にまみれたマンスールは、無念の涙を吞んでモロッコへ渡り、アフリカじゅうへ召集の触れをまわしたのであった。あたかも聖戦に駆けつけるがごとく、人がわれもわれもと参集した。トルコ人、アラブ人、あの剽悍な戦士たち、いくさで弓を射れば百発百中の彼らは、トルコ弓や鹿角石弓を携え、大小の道を埋め尽くした。ムワツヒドの徒やマリーンの輩も加わった。彼らはラクダの背に竈や石臼を積んでいた。東方のイスラム教徒もこぞつて参陣していた。このような者どもが道々を埋め尽くした。こうした雲霞のごとき言語に絶する大軍勢がそこに集結した。土地も違い考えも違う者ども、族類を引き連れ汚く煤けた地獄から這い出てきたサタンより醜惡な者どもであった。集結が完了すると、軍勢は海を渡りジブラルタルという港へ至った。マンスールは武勇の誉れ高き伯への報復を目論み、一刻も早くそれを果たしたいとじりじりしていた。さらにマンスールはコルドバ、ハエーンはじめ全アンダルシア、

ロルカ、カルタヘナはじめ全アルメリア、そのほかいちいち名前を挙げればきりが無いほど数多くの土地から、強大な騎馬軍団を集めた。兵が揃うと進発。マンスールは、必ずやスペインを平らげられると固く信じていた。そうして、カステイリヤ伯も逃さず虜にして惨めに死なせるのだとも。呪われた者どもは、はやアシーナスまで進み、カステイリヤ方は全軍ピエドライタにあった。伯は——伯の魂が罰を免れんことを——ゆかりのサン・ペドロ僧院を訪ねた。

## 一七 伯のサン・ペドロ・デ・アルランサ僧院訪問と聖ペラヨ、聖エミリアヌスの出現

伯が僧院を訪ね、ドン・ペラヨなる僧はいるかと問うと、亡くなった、一週間前に埋葬を済ませたとの返事。伯はこのうえなく神妙な面持ちで僧院の中へはいり、ひざまずいて祈った。目から涙を流しながらの祈願であった。「主よ、われをあやまちと危機より守りたまえ。主よ、わたしはあなたに尽くさんとの熱き思いに動かされ、艱難辛苦に耐え、また数々の快楽も遠ざけている。わが身を苛み、あなたに犠牲を捧げている。イスラム教徒やキリスト教徒と激しく争っている。スペインの王らはモロのマンスールに震えあがり、主たるあなたを忘れ（……）彼に従う者となった。わたしは王らがかくのごときあやまち犯すのを見、死を怖れ唾棄すべきふるまいに及ぶのを見て、それからは味方するのをやめた。あなたに仕えることを選び、王らの意を迎えるのをやめた。王らに挟まれ孤立無援となるも、死を怖れなかった。同じ罪を犯したくなかったのだ。彼らはわたしが寄る辺なしと見るや、それぞれが耐え難い圧力をかけてきた。あの日、ムニヨのわたしのもとへ書状が届いた。あの日、使いが五人やってきた。アンダルシアの王どもが脅しをかけてきたのだ、スペインを統べる者のうち、わたし一人が靡かぬのを見て。王どもは陸から海から、寄つてたかつて攻めかかつてきた。わたしをあの手で送り出せるものなら送り出したかったのだ。だが主よ、あなたに助けられ守られた。主よ、あなたの力により彼らを討つて勝利した。思うにわたしはあなたの意に逆らったことは一度たりとない。かつてあなたの嘉したもうことをなし

たとすれば、それはわが喜び。わたしは固く信じている、あなたに見捨てられるいわれはないと。イザヤ書のあなたの言葉によれば、あなたはけつしておのれに従う者を見捨てたまわぬ。主よ、わたしはわが家臣ともどもあなたのしもべ、一生涯あなたのもとを離れまい。主よ、あなたに助けていただかねばならぬ。主よ、カステイリヤを守護したまえ。アフリカじゅうがわたしへ向かつて押し寄せている。主よ、あなたの助けなくしてカステイリヤは守れぬ。この身に備わる知恵と武勇がどれほどであれ、とても守ることなどはしまい。主よ、わたしに知恵と力と勇気を与え、マンスールを討たせたまえ、彼に勝たせたまえ」

夜を徹しての祈りで神と言葉を交わすうち、伯は抗しがたい心地よい眠気に襲われ、甲冑のまま横になった。肉体は寝入った。かくして横になり寝に就いた。武勇の誉れ高き伯がまだ深い眠りに陥るまえであつたらう、聖ペラーヨ修道士が降臨した。その全身を包む太陽のような衣服は未曾有の美しさ。聖ペラーヨはドン・フェルナンド伯の名を呼んで言った。

「寝ているのか。さもなくばなぜそのものを言わぬ。起きよ。あなたの道をゆくのだ。今日、味方はおおいに増大する。ゆけ、あなたの兵が待っている。創造主への願いは申し分なく叶う。あなたは異教徒の屍の山を築くであろう。味方の勇者らもそこで大勢討ち死にするであろうが、どれほど痛手を受けようと、いくさには勝利するであろう。崇高なる創造主はさらにこうも言いたまう、あなたは神の臣下、神はあなたのあるじ、あなたは異教徒と戦い、忠義を尽くしていると。神はマンスールを迎え撃ちにゆけと命じたまう。いくさのとき、わたしはあなたとともにあるであろう。神がこれを許したもうた。使徒聖ヤコブ(1)も呼び寄せられるであろう。ドン・キリストがわがしもべを助けるべく遣わしたまうのだ。かような天佑によりマンスールは打ち破られるであろう。ほかにも大勢駆けつけるであろう、夢まぼろしに見るごとく。それは神より遣わされた天使の一団。おのおの白き具足に身を固め、槍の旗には十字の印。われらの姿を目にしたイスラム教徒どもは戦慄するであろう。友よ、託された言葉は伝えた。もはやわたしをここへ遣わした方々のもとへ戻らう」

二人の美しい天使が彼を地上から持ちあげ、歓喜のうちに天へ運んでいった。

ドン・フェルナンドは戦慄して目を覚ました。

「これはいったい……主よ、われを助けたまえ！ これは悪魔、わたしをなにかの罪に陥れようと図っているのだ。キリストよ、わたしはあなたのしもべ。われを守りたまえ、主よ！」

見た夢について伯が思いを巡らせているさなか、彼を呼ぶ大きな声が聞こえてきた。

「そこから起きよ。ゆくべき道をゆくのだ、ドン・フェルナンド伯よ！ マンスールが強大な軍勢を率いて待ちかまえている。なにをぐずぐずしている、ゆくべき道をゆけ。そうしてくれねば、わたしはつらい目を見ねばならぬ。長く待たされれば、それだけおまえを詰らねばならぬようになるのだ。けっしてマンスールと休戦してはならぬ。和睦などはもつてのほか。総勢を三つに分け、おまえはそのうち最小の隊を率いて東より攻めかかれ。戦端が開かれたあと、わたしが戦いに加わるのをその目ではつきり見るであろう。別の一隊は西より攻めさせよ。やがて聖ヤコブが現われる。このことまちがいない。残る三番隊は北より攻め入らせよ。疑うなかれ、われらはあの荒獅子を退治する。もしこのとおり行なえば、素手で獅子と格闘したサムソンのごとく打ち勝つであろう。もはや言うべきことは言った。そこから起き、ゆくべき道をゆけ。この言葉を伝えた者が誰か知りたくば、わが名は聖エミリアヌス(1)。イエス・キリストより遣わされし者。いくさは三日のあいだ続くであろう」

ドン・フェルナンドにこれだけのことを伝えおえると、聖なる人ドン・エミリアヌスは天へ昇った。武勇の誉れ高き伯はただちに僧院に別れを告げ、前日あとにしてきたピエドライタへの帰途についた。伯が忠良な味方のもとへ戻ると、家臣らは烈火のごとく怒って口々に問い質し、かつ凄まじい激しきで罵倒した。(……) みな心配もしていればひどく腹も立てていて、伯を槍玉に挙げぬ者はなかった。

「伯よ——と、異口同音に言った——あなたはほうもないあやまちを犯した。もしもなにか危うい目に遭おうと、それは自業自得にはかななるまい。夜働きにいく盗人でもあるまいに、あなたはひとり出歩くのが好きだ。おまけに探してもみつからぬ。われら、これひとつでなんらかの窮地に立たされるかもしれぬ。こうも不安にさせられては、妙な考えすら浮かびかねぬ。なにとぞお頼み申したい、われらを裏切り者にはしたまうな。われら

の父祖は、まちがつてもさような者にはならなかったのゆえ。世にあれば忠義忠節を尽くした人々はなかった」かくして遠慮会釈ない罵倒を受けたあと、ドン・フェルナンドは言った。

『どうか耳を貸してもらいたい。わが行ないには少しも悔いもない。わたしが務めを果たさぬあるじとは思つてくれるな。友を訪い二人で楽しい時をすごそうと、僧院へいつていたのだ。ところがあちらへ着いて様子を尋ねてみれば、別のお方のみもとにあるとの返事。友の死を知り、墓へ案内されたわたしは、イエス・キリストに願つた、もしも彼がなにか罪を犯したとすれば、広大無辺のみ心もて赦したまへと。それから僧院の内へはいり、そこで、神により心の中、胸の内へ注ぎ込まれた言葉で祈つた。やがてかの僧がまぼろしのごとくに現われて言つた、『起きよ、友よ、時がきた。もはやその時』。夢に聞いた言葉であつたゆえ、わたしはこれ信じなかつた。目が覺めたが、そこにはなにも見えなかつた。すると天より大きな声がおりにてきた。どうやらそれは聖人の声。それはかように告げていた。

『フェルナン・ゴンサレス伯よ、そこから起きて、ゆくべき道をゆけ。あなたは三日ののち、いくさ場にてアリカとアンダルシアの軍勢を相手どり、大勝利をあげるであろう』。そしてつづけて、『なにをぐずぐずしている。それは王の中の王に対する罪。あなたは彼への愛ゆえに戦つてゐるのではないか。進め、一刻も早く、あの異教徒の軍勢へ向かい。神助があるのだ、なにを怖れることがある』と。ほかにも聞いたが、それは言わずにおこう、あまりに長い話になってしまうであろうゆえ。だが、まもなくあなたたちは身をもつてそれがなにかを示すことになる。そのときまで黙しておこう。あの僧院では、神の寵児たるしもべ、修道士ペラーヨ師からありがたい言葉を聞いた。その言葉によりわたしはマンスールを打ち負かし、続いて追撃、その墓をみつけた。あなたたちもわたし同様わかる時がくるであろう。ゆえにそれまで、わたしが棟梁の務めに反したと断じるのは待つがよい。あなたたちがわたしの至らぬせいであやまたぬよう、力を尽くすつもりだ。われらは神の言葉にも人の言葉にも耳を傾けねばならぬ。さもなくば、アフリカの者どもによいようにもてあそばれるはめになる。アレクサンドロス大王は精強なる大軍勢を率いていた。しかしその彼も、生涯一度としてわが軍のごとき軍勢は集められなかつた。

一同には言うまでもないが、敵とわが勢は千対一。すでに話に出たとおり、われら策を練っておかねばならぬ。たとえ逃げたくとも逃げられず、われらは袋の鼠同然。アラゴン、ナバーラ、それに加えてポアトゥーの者らもみな、われらが窮地にあると知ったなら、味方するどころか道をふさぎ、蟻の這い出る隙もないよう凶るに相違ない。周りは殺しても飽き足らぬほどわれらを憎む者ばかり。われらの罪深さゆえにもしもこのいくさに敗れば、敵に報復されるのは疑いない。われらは虜となり、腹を空かせ、苦しみを忍ばねばならぬ。われらの子らは、イスラム教徒どもの子とされてしまうであろう。われらの愛し子、息子や娘が虜となるのをなす術なく見ているほかはない。ゆけと言われるところへゆかねばならず、それから先息子や娘にはもはや二度と会えまい。虜の身には幸せなどかけらもなく、それどころかもう死にたいという嘆きばかりを口にし、そしてまた訴えかけるだけ、『世を統べる主よ、なにゆえわたしから目を背けたまうのだ？ 苦しみと絶望の日々を送らせたまうのだ？』と。

ただ死ぬだけならば楽ではあるが、日々死ぬことは耐え難い、来る日も来る日もつらさを忍ぶこと、果てしなき苦しみを味わうこと、敵にわがものを乗っ取られるのを見ねばならぬことは。されど次はまさしくこれを、正しき教えに背く者どもに味わわせてやるのだ。彼らはわれらの土地をわがものとし、力づくで領有している。だが今は乱れている運命の車の動きもいずれば直り、あの者どもは打ち負かされて、キリスト教は光り輝くことになる。運命の車は常にひとつところには留まらず、人の禍福はあざなえる縄のごとし。運命は禍福をまたたくまに逆転させ、貧しき者を富める者へ、富める者を貧しき者へと変えてしまう。こうなるのは創造主のみわざ。われは万物の上に君臨する者なりと、与え奪いたまう。それゆえ負けを重ねた者も、やがては勝者となることもある。かくのごとき天主に対し、深き神慮もてわれらを助けたまえと願わねばならぬ。栄枯盛衰、なにことも神のみ心しだい。なぜなら天佑なくして人はなにもなし遂げられぬゆえ。

一同よ、わが言葉を胸に刻んでおくがよい。もしも負ければ万事休す。悪人のごとく殺され、土地を失わねばならぬ。このたび倒されれば二度とは立ちあがれまい。わたし自身いかにふるまう決意か、それを一同に伝えておこう。捕らわれ人にも囚人めしうどにもならぬつもりだ。生け捕られようとしたときは、そうなる前にみずか

ら始末をつける覚悟。一同のうちでいくさ場より逃れる者や、死を怖れみずから虜となる者、かくのごとき所行に及ぶ者があれば、裏切り者の汚名を着るがよい。死んでのちはユダとともに地獄で苦しむがよい」

伯の言葉を聞いた十字架の戦士らは、打てば響くように異口同音に叫んだ。

「あるじよ、われら一同、あなたの言葉に従おう。敵に後ろを見せる者はユダと地獄で抱きあうがよい！」

それまで生きた心地のしていなかった人々は、伯の言葉を聞き勇氣百倍、騎馬武者も徒武者も。伯はこの偉大なる戦士らに命を下した。

## 一八 陣形——火中の蛇

伯は明日はいくさに備えよと命じた、夜の明けしだい全員鎧兜に身を固め、野に出て陣形を作れと。あの異教徒の軍勢に、野合戦を挑もうというのであった。サラスの人ドン・グステイオ・ゴンサレスとその息子らに先陣が委ねられた。また、この親子とともにドン・ベラスコにも。彼もまたその川沿いの地方の住人で、死を怖れず突進するのは疑いなかった。この先陣にゴンサロ・ディアスも加わった。評定においてはたえて激することなき立派な人物ながら、いくさに臨んでは猛きこと荒獅子のごとく、挑む者あれば堂々受けて立った。このとき伯は二人の甥を騎士に叙任し、やはり先陣に加えた。兩人とも剽悍なつわもの、血に飢えた狼との異名をとっていた。グステイオ・ゴンサレスの手勢、この卓抜なる騎馬武者の数は二百人。伯は彼らに一方から攻め込むよう命じた。彼らは全軍中比類なき人々であった。この先陣には徒武者六千がつけられた。ラ・モンターニヤの剽悍な一団で、しかるべくいくさ支度していれば、たとえ三倍のイスラム軍相手でも退かぬ人々であった。万全の備えを終えた先陣についてはこれぐらいにしておこう。率いる者にとつてはこれ以上を望むべくもあるまい。いかなる軍勢もこれを敗ることはまずできまい。他方、別の陣もすでに準備が整っていた。これは質実剛健なるビスカヤの人ドン・ロペに委ねられた。この陣にはドン・ライーノの息子や、ドン・マルティノという名のラ・モンタニヤの人

がいた。ラ・ブレーバの人々からもトレビニヨの人々からも、剽悍無比の騎馬武者が加わっていた。みずから数々見事な働きをしてきたカステイリーヤ・ラ・ビエーハのつわものらも顔を揃えていた。またカストロヘリスの猛者連や、彼らとともに山の人々も加わっていた。さらにはアストウリアスの戦士らも。いくさの手練れ、武勇にすぐれ、知謀にかけても非の打ちどころなき人々であった。この騎馬軍団が本隊。この二百騎がカステイリーヤ軍の精鋭。翌朝、全軍が野に展開した。イスラム教徒にとっては、惨憺たる一週間のはじまりであった。先陣には加勢として徒武者六千が与えられていたが、これは彼らがひと塊になつて敵陣へ分け入り敵を散らせたところで、騎馬武者が適当な隙をみつけうまく攻め入るため。武勲赫々たるドン・フェルナンド伯は、その日従士二十人を騎士に叙任した。この二十人は武勇の誉れ高き伯と同じ陣に加わった。この陣は総勢五十騎という少人数であつたが、そのほかこれに加わっていたのはララ特別区の住人のうちルイ・カビアとヌニョ、加えて山の住人すなわち伯が以前イスラム教徒から奪いとつたある険しい山地に住まわせていた人々。さらには、その日伯により騎士に叙任されたベラスコス一族の人々もいた。この陣につけられた徒武者は三千人で猛者揃い。死をものともせず向かつていくであろう人々。東の果てから西の端まで探しても、これにまさる勇者はみつかるまい。

一同に対し伯は次のようにせよと指示した——もしも一日で勝負を決められねば、角笛の合図でいくさ場から総引き揚げし、わが旗のもとへ集まるべし——。武勇の誉れ高き伯はしかるべく陣立てを行ない、将兵を配置し、準備万端整えた。各人、それによりどう戦いをはじめればよいかしかと飲み込み、わが天幕、わが寝場所へ戻った。十字架の戦士らは夕食をとり、かつくつろいだ(……)誰もが喜び心に満ち、時に臨んでは尊き力を発揮して、われらを助けたまえと天に祈った。その夜、彼らは想像を絶する光景を見た。なんと空に一頭の猛り狂う大蛇が出現したのである。そのおぞましい怪物は全身血まみれ、深紅に染まり、耳を聳さんばかりに吼え狂っていた。どうやら傷を負っているようであつた。その咆哮に空は割れんばかり。吐き出す炎は軍勢を照らし、われらを焼き殺しにきたかと将兵は怖気をふるった。軍勢の中のいかなる勇者といえど、顔色をなくして震えあがつた。腰を抜かしてへたり込む者も少なくなかつた。十字架の戦士は誰もが恐怖に震えた。人々はすでに寝入っていた伯



を起こしにいった。伯が外へ出てみると、もはや大蛇は消えたあと。見れば将兵はみな生きた心地もない様子であつた。大蛇があらわれたときの様を尋ねると人々は、これこれのようであつたとその一部始終を語つた——あの猛々しい怪物は傷を負っているかのごとくすさまじく咆哮していた、そして体が紅蓮の炎に包まれていた、地を焼かぬのが不思議なぐらいであつた——。彼らが見たままを語る様子を前にして、伯はその恐怖の大きさをひしひしと感じた。同時にそれが悪魔の作り出した魔物で、キリスト教戦士を動揺させようとのたくらみと見抜いた。さらには、イスラム教徒を助けるためあらわれたのだ、悪魔どもがこうしてキリスト教戦士を脅そうとしたに相違ない、そうしてわれらに火を放ち、退却させようと目論んだのだと信じた。武勇の誉れ高き伯は家臣を集めさせ、顔ぶれが揃つたところで話を聴くよう促した、これから大蛇の示すものがなにかを説き明かすゆえと。そうして占星術師について語りはじめた。

「卿らには言うまでもないが、イスラム教徒が導き手とするは神ではなく空の星。星をたのむのだ。星を新たな創造主として崇め、星をとおして多くの驚異を見ると言う。彼らの中には魔法に通じた者もいて、術を使つて雲や風を操り極悪非道の行ないをする。その知恵を与えているのは悪魔にほかならぬ。今度も悪魔どもが呪文で呼び出され、彼らと額を集めて相談したのだ。悪魔どもにおのれらの父祖のしくじりを、あらいいざらい打ち明けた。この嘘だらけ、地獄の煤だらけの者どもが、寄り集まつて相談した。魔法を知るところかの薄汚れたイスラム教徒が、悪魔を大蛇の姿に変え、われらの意気を挫こうとした。このペテンでわれらを動揺させたかったのだ。賢明な卿らのことゆえ言うまでもあるまいが、悪魔はかつて持っていた大きな力をドン・キリストにとりあげられた。もはやわれらに對しなにができるわけもない。思うがよい、悪魔を信じる者の愚かさを。この世の万物に、力を及ぼすことのできるお方はただひとり。われらみな、そのお方にのみ従わねばならぬ、なにせ生殺与奪はみ心のままであるのゆえ。われら、かくのごときあるじを畏れねばならぬ。このあるじを捨てて悪魔を信じる者は、思うに烈火のごとき神の怒りを買ひ、その魂は、あわれ、さまよい歩くはめになる。かような者は誰もが悪魔の思う壺。目下のことへ話を戻せば、われらはおおいに働いた。それゆえ体を休めておかねばならぬ。夜が明けた

らば野へ出て敵とまみえよう。おのおの手筈どおり配置につこう」

人々は幕舎へ戻り、寝に就いた。やがて鶏が羽ばたきだすころ、いつせいに起き出してミサにあずかつて神に告解、罪を打ち明けた。みなみな祈りを捧げ、犯したあやまちを悔い、聖別された聖体を拝領し、心の底から天佑を願った。そうこうするうち夜が明け、十字架のもとに戦う人々は、誰もが鎧兜に身を固めると、命じられたとおりの隊列を作った。おのおの自分がどう配置されたか、しっかりと呑み込んでいた。

## 一九 アシーナスの戦い

全将兵は遅滞なく隊列を組み、部隊ごとにいつせいに進撃を開始。陣形を整え、攻防した。双方、多数が討ち死にした。ドン・フェルナンド伯、この律儀なる棟梁、さながら全将兵の中に聳える堂々たる城と見えるこの人は、敵の先陣を大きく切り裂いた。そのとき伯の盾には無数の矢が立った。伯は目前にあらわれる隊列を次々と撃破。伯の向かうところ退かぬ敵はなかった。伯が槍を振るう音は遙か遠くまで響いた。(……) 伯が敵勢の中を駆けまわる様は、さながら飢えた獅子。伯は敵を討ち、倒すことに、それほど執念を燃やしていた。ゆく先々一面血の海となった。そのとき伯は数多くの魂を悪魔に渡したのであった。アフリカの諸王中、ひとり大力無双の者があった。他の王らに混じればまるで巨人と見えた。その王が伯を探し求めていた。伯もまた彼を探した。アフリカの王は伯の姿を認めると、前に立ちはだかるべくそちらへ向かった。相手が全身から怒気を発して近づいてくるのに気づいた伯は、馬に拍車を入れ迎えに出た。双方槍を構えると、相手めがけて突進し、塔をも割らんばかりの猛烈な一撃を交わした。ともにその場に釘づけになった。深手を負い、気を失いかけた。口が利けなかった。それほど激しく突かれていた。どちらもすさまじい一撃により傷を負った。ドン・フェルナンド伯は深手を負いつつも、相手が正気に戻りきるまえに再度激しく突きかかった。すると相手はたまらず馬上から地面へ転落。それを見たイスラム王の家臣らは、武勇の誉れ高き伯を取り囲んで激しく攻め立てた。そのとき力ス

ティーリヤ戦士らも、手をこまねいてはいなかった。猛然と戦い、あるじを救出した。カステイーリヤ伯はもとより、以前は怖れおののいていた家臣らも、このときには一騎当千の勇士と化していた。伯の乗馬は深く槍で突かれ、はらわたが蹄までぶら下がっていた。伯の忠実な愛馬は死ぬ運命にあつた。馬を失うのにこれ以上間の悪いときはなかった。退くもならず逃げるもならず。伯の焦りは言いあらわしようもなかった。下馬した伯の周りを家臣が取り囲んだ。伯は盾を胸の前に構え、剣を抜いた。

「キリストよ——と伯は祈った——その尊き力もてわれを助けたまえ。今日カステイーリヤを見放すなかれ」  
イスラム方は大軍、伯を十重二十重に取り囲んだ。武勇の誉れ高き伯は、徒立ちながら武勇の士の本領を発揮し、四方八方斬りまくった。伯の忠臣らも遅れず助太刀した。やがて伯は求めていた馬を渡された。伯はおおいに喜び、神に感謝を捧げた。

「主よ、かくも大きなお恵み、感謝してもしきれまい。絶体絶命の窮地にあるわたしを、よくぞ助けたもうた」  
伯はこれまでもまさる働きをした。羊の群れの中に飛び込んだ狼さながらであつた。ここでいったん伯から離れよう。(……) 先陣を率いていたドン・グスティオ・ゴンサレス、彼の向かうところおびただしい血が流れた。それは泉から湧き出る水のごとき大きな流れとなつた。彼はこの荒夷<sup>あらび</sup>どもを討つて討ちまくった。その間イスラム軍も手をつかねておらず、徒武者の屍の山を築いていた。おお、両軍、数えきれぬほどの討ち死に！ 剣戟の音に山も鳴動した。ドン・デイエゴ・ライーネスは、二人の兄弟とともにカステイーリヤ兵を率いて別方面から攻め、異教徒に大打撃を与えていた。イスラム教徒、キリスト教徒、次々と折り重なつて斃れた。一進一退の攻防がまる一日つづいた。勝利への執念はすさまじかつた。際立つ働きをしていた者は武運めでたしと満足していたが、中でもドン・フェルナンド伯は圧巻。全身全霊を傾けて戦い、無数の異教徒を討ち取つた。

「キリストよ、慈悲深き父よ、われを助けたまえ——と、伯は祈った——今日あなたのお力により、キリスト教世界の賛美されんことを！」

伯は口の中も周りも土埃だらけになつていた。「本日は勇め、家臣よ、縁者よ！ 勇者たちよ、今日がいかなる

日かに思いを致すべし！」そう叫んで督戦しようにも、ほとんど言葉を発することができなかった。伯は言った。「手厳しく攻めよ、わが忠実なる味方の人々よ。おまえたちはマンスールから幾たびも苦汁をなめさせられた。恨みを晴らさんと一心に念じよ。忘れるな、われらはそのためここへきたのだ」

日が沈み宵闇が迫るころになっても勝負はつかなかった。そこで伯が角笛を吹かせると、いつせいに伯の旗のもとへ引きあげてきた。カステイリーヤ戦士はじめ十字架のもとに戦う人々は、イスラム教徒どもを幕舎から叩き出していった。ドン・フェルナンド伯とその一党の騎士団は、おかげでその夜全員が快適に過ごした。伯とその一党が奪い取ったのは願ったり叶ったりの寝場所。要るものはすべて揃っていた。彼らは鎧兜のまま、ひと晩じゅう寝ずにすごした。翌朝、正しき教えを信じぬ者どもは、いくさ支度をして野に出てくると、耳を聳する雄叫び、凄まじい喊声をあげた。山も谷も揺れんばかり。かたやドン・フェルナンド伯と麾下の勇敢なる人々は、朝、揃ってミサにあずかったあと、一時課の鐘の刻限、いつせいにいくさ場へ押し出し、野を進んで布陣した。そうして榮光に包まれた使徒聖ヤコブを呼び求めつつ、前日の戦いの続きを開始した。両軍対峙し、やがて矛を交えた。いくさはカステイリーヤ人の得意とするところであった。伯の旗を掲げるその旗手オルビタは、襲いかかる敵の攻撃に厳のごとく耐えた。勇士ティエリー・ダルデンヌといえど、旗手たることにおいてこれにまさるものではなかった。(オルビタは現在サン・ペドロ・デ・カルデーニャ修道院に眠っている。神よ、その魂を赦したまえ。)心強い人、人々を教え導くあるじ、気高さの鑑ドン・フェルナンド伯は、片時も手を緩めず異教徒を攻め立てた。そのとき伯は味方をこう励ましていた。

「一同、貧苦を力のもととせよ！」

大蛇おろちより猛きドン・フェルナンド伯は、灼熱の日に煽られるようにおおいなる武勇を発揮。悪しき者どもにかかつていき、討ちまくった。そうして正しき教えを信じぬ者どもの屍の山を築いた。ここで、奮闘する伯のもとをいったん離れよう。伯はまさしく空前の武勇の士であった。他の人々へ話を移せば、この興亡のかかった一戦、誰もが死にものぐるいで戦っていた。両軍、激しく矛を交えた。ああ、双方なんと多くが討ち死にしたことか！

やがて日が暮れ、両軍矛を収めた。どちらもそこまで出張ってきた目的を達成できなかった。将兵は傷つき、腹を空かせて天幕へ戻った。過酷な一日をすごし、疲労困憊していた。その日の死傷者は数えきれなかった。夕食を摂り、鎧兜を外さぬまま朝まで寝た。武功赫々たるドン・フェルナンド伯は、宵の口に一党の騎士団を呼び集めた。みなたち伯のもとへ馳せ参じた。疲れ傷ついてはいたが、伯の言葉を聴くべく寄り集まった。

「一同よ——と伯は言った——どうか氣力を振り絞ってくれ。いかに苦しくともめげてはならぬ」

#### 伯の激励。三日目のいくさの開始

「一同よ、どうか氣力を振り絞ってくれ。いかに苦しくともめげてはならぬ。明日、第九時までにまちがいなく大きな助けがあらわれる。そうして卿らは勝利を収め、いくさ場をわがものとする。もしも勝とうと思うなら、明朝、日の出まえにいくさ場へ出て、全身全霊を傾け、息つく暇も与えず猛烈に攻め立てよ。さすれば敵はいくさ場を明け渡さざるをえぬ。討ち取られるか、あるいは打ち負かされて、必死ならからは逃れられまい。ひとたび勝ちを得て、敵をいくさ場より追つたらば、逃げる敵のあとを追って、なめた辛酸の恨みを晴らそうではないか。なんの、われらは負けはせぬ。そうなるまえに一人残らず死を選ぶであろう、生け捕りにされるのをよしとせぬであろうゆえ。これが最善の道とわたしは信じている」

人々は伯の言葉を聞きおえたあと、各自の宿所へ戻り、寝て心身を休め翌日に備えた。やがて未明になると、起き出して甲冑を身に着けた。イスラム軍も、いくさ支度をしていくさ場にあらわれた。キリスト教戦士らは顔の前で十字を切り、「この敵との戦いに臨むわれらを加護したまえ」と一心に神に祈った。祈り終わると、槍を構え、「聖ヤコブ！」と叫びながらイスラム勢めがけ突撃を開始。彼らはそれまでの二日間の戦いで疲れきっていたが、戦いをはじめるとあたり、前の二回るときより意気盛んであった。剛勇無双のドン・フェルナン・ゴンサレス伯は、あたるを幸い敵を薙ぎ倒した。すると、しまいには前に立ちはたかろうとする者がいなくなった。味方のほかのつわ

ものらも傍観してはいなかった。槍で突きあう音、柄で叩きあう音、そのようにして振るわれる槍の折れる音は耳を聳せんばかり。それは遙か遠く離れた場所まで届いた。各人闘志満々、槍も剣も休むときがなかった。兜は打たれ、打たれた音は響き、剣は砕け、鎖帷子は千切れた。誰もがみな伯から目を離さず、神の使いを守るように彼を守っていた。「カステイーリヤ！」と励ます伯の声を聞き、力の湧かぬ者はなかった。その声のたび元氣横溢した。誠実なる隊長ドン・グステイオ・ゴンサレスは、敵の先陣を大きく切り裂いた。しかしアフリカの王の一人で剛の者が兜を真つ向一撃。太刀風鋭く振り下ろされた刃は、兜やその下の鎖頭巾、兜下を二つに切り、目のあたりまで達した。この一撃でドン・グステイオは討ち死に。そこで死んで倒れたのは彼一人ではなかった。彼の隊にいた伯の甥も、武勇を誇るあるイスラム教徒と戦つて命を落とした。その男はイスラム軍中随一のつわものであった。このとき、ほかにもキリスト教徒が多数討ち死にした。しかしただ斃れたのではなく、異教徒を数えきれぬほど討ち取り、その武勇伝はのちのちまで語り継がれた。一報がドン・フェルナンド伯のもとへもたらされた——抜きん出た人々が命を落とした、みな衝撃を受け意氣阻喪している、もしも伯が駆けつけねば総崩れになつてしまふ——。それを耳にした伯は、すわ一大事とたち馬を駆つて駆けつけた。着いてみると場は大混乱に陥つていた。伯がきていなければ、みな生け捕られるか殺されていたにちがいない。伯はたちに敵勢に襲いかかった。追いつかれた者で無事済んだ者は稀であった。伯は叫んだ。「カステイーリヤ伯ここにあり！ 奮い立て、カステイーリヤのつわものたちよ！ 容赦せず厳しく攻め立てよ、かたがたよ、者どもよ！」

苦戦していたキリスト戦士らは、そういう伯の姿に、追い込まれていたにもかかわらず恐怖を忘れ去つた。あるじの勇姿を見て誰もが勇氣百倍、異教徒の軍勢を猛然と攻め返した。心雄々しきカステイーリヤ伯は叫びつづけた。「かかれ、つわものたちよ！ すでに勝つたも同然。今日奮い立たねばいかにしてパンを得る。奮い立てぬようなら、はじめから生まれてこぬほうが遥かにましだ！」

伯の言葉を聞いて、なお怖れをいだく者のあつたためしは知らぬ。伯と行をともにする者に悪心など起こりようがなく、伯と寝食をともにすれば、誰もが類いなき忠誠の士となつた。少し前にグステイオ・ゴンサレスを討ち取つ

た男は、伯とだけは遭遇したくなかった。そうできればありがたかった。だが、カステイリーヤの棟梁とともに  
出くわしてしまった。そのアフリカの大王は、伯に敵する者はないと聞き及んでいた。それゆえ逃げられるものな  
ら逃げたかった。しかし伯はその時を与えず襲いかかった。間髪を容れず突進し、王の盾を割った。研ぎすまされ  
た穂先がさらに鎧を貫くと、イスラム王は死を免れず落馬した。これはアフリカ勢にとつて大きな衝撃。それでな  
くてさえ武勇の誉れ高き伯に、みなさんさん痛めつけられていたのであった。百騎あまりが伯へ向かつて殺到した。  
戦いはいつそう激しさを増した。カステイリーヤ方の討ち死には四十人以上、そこかしこに空鞍の馬がさまよつて  
いた。ドン・フェルナンド伯にとつて、これほど家臣を失ったことは痛恨の極みであり、カステイリーヤはきつと  
滅ぶと本気で信じた。ドン・フェルナンド伯は焦りの色を濃くしていた。いざ負けいくさとなつたときに備え、死  
ぬ覚悟を決めていた。天を仰ぎ創造主に願つた。眼前にいるかのごとく語りかけた。

「この戦いに武運拙く敗れるのであれば、たとえ落ちのびられようとそれはすまい、これにまさる痛恨事は二  
つとなかろうゆえ。死に場所を探し、そこへ飛び込む覚悟はできている。カステイリーヤはあるじを失い、碎  
け散るであろう。この惨めな罪びとは、かような無念の思いを胸に立ち向かつてゆく。モロのマンスールの虜と  
なつてしまいかねぬが、そうなるまえにいつそ死を選ぶほうがまし。主よ、なにゆえわれらにかほどまで怒りた  
まう？ われらに罪あるとてスペインを滅ぼしたまうな。われらのせいでスペインが滅ぶは、人々の目に理不尽  
と映ろう。よきキリスト教徒においては類例があるまい。父よ、世のあるじよ、まことの救い主イエスよ、あな  
たはわたしへ告げた言葉をなにひとつ叶えたまわなかった。あなたはわたしに加勢すると約束なさった。あなた  
に背いた覚えはないに、なにゆえ言葉を違えたまう？ 主よ、わたしはあなたに見捨てられた。なにかの咎であ  
なたの不興を買ったのだ。主よ、せめてわが伯領をその手に収めよ。そうせねば、またたくまに荒らしつくされ  
てしまうであろう。されど、かようにただ見放されて死ぬのはいかにも無念。その前にイスラム教徒どもにひと  
泡吹かせてやるつもりだ。傷を負い、疲れたこの身ながら、世の終わりまで語り継がれる勲しを打ち立ててみせ  
よう。もしもあなたから大きな恩寵を賜りマンスールへ近づけたなら、なんの、生きて逃がしなどするものか。

わが命失う恨みをわが手で晴らすつもりだ。このいくさ場で果てた家臣みなのかたきを、今日あるじの手で討つことになる。この伯は彼らと天国でまみえ、おおいなる栄誉を与えるであろう」

## 二〇 使徒ヤコブの出現と勝利。討ち死にした人々のサン・ペドロ・デ・アルランサ僧院への埋葬

ドン・フェルナンド伯は神に憤懣を吐き出したのち、ひざまずいて祈願した。すると伯を呼ぶ大きな声が響いてきた。

「カステーリヤのフェルナンドよ、今日おまえの軍勢は大軍となる」

誰が呼ぶのかと見あげると、頭上に聖使徒の姿があつた。使徒は騎士の大軍勢を率いていた。伯の目には、どの騎士も武具に十字の印をつけていると見えた。その軍勢は隊列を整然と整えると、イスラム軍めがけ攻めくだつてきた。かつてこれほど勇ましい軍勢のあつたためしはなく、これを前にモロのマンスールとその麾下の軍勢は、なす術なく立ち往生した。彼らはひとつの旗のもと、これほどの大軍が集まっているのを見て戦慄した。恐怖に震えた。それがどこから攻め寄せてくるかにも驚いていたが、なにより衝撃を受けたのは各騎が十字の印をつけていること。マンスール王は言った。

「信じられぬ。伯のこの強力な援軍はどこから湧いて出たのだ。今日、伯を殺すか捕らえられると信じて疑わなかつた。ところがかえつてこちらが伯の軍勢に攻め寄せられるとは！」

あわれキリスト教戦士の面々は疲れ果て、もはや命はないものと諦めきつていたが、使徒の降臨で元氣横溢。かつてないほど活力が漲つた。勇気百倍、恐怖は雲散霧消、異教徒を討つて討ちまくつた。アフリカ軍はたまらず背を向け、いくさ場から離脱していった。ドン・フェルナンド伯は、敵が命惜しさに背を向けいくさ場から逃げていく様を見て、味方ともども靴に拍車を着け、手に鞭を持ち、厳しく追撃しはじめた。彼らはイスラム軍を追いつつマンスールの間近まで迫つた。多くを虜とし、多くを討ち取つた。追撃は一日と二晩間断なくつ



づいた。のち、三日目にアシーナスへ引き返し、討たれた味方を調べてまわったが、累々たる遺体はどれも血まみれ。誰が誰と判別しがたかった。人々は埋葬のため遺体をそれぞれの在所へ運ぼうとした。しかし明徳の人ドン・フェルナンド伯は言った。

「卿らよ、それはよいやり方とは思えぬ。亡骸を運んでどうなるのだ。それは故郷の人々へ深い悲しみを運ぶだけのこと。死者が生者の妨げとなつてはならぬ。泣いて死んだ者が帰ってくるわけでもない。この近くによい僧院がある。思うにそこへ埋葬するのが上策。死んだ者たちにとり、かほど名誉な場所はあるまい。わたし自身の埋葬も頼んでいるのだ。死んだのちは遺体をそこへ運んでくれるよう。わたしはあの僧院の格をことのほか高いものとするつもりでいる」

一同、伯の考えを諒とし、討ち死にした味方の遺体をそこへ運んでこのうえなく丁重に埋葬し、終えると帰路についた。

## 二一 レオンの王国議會——鷹と馬の売却

サンチョ・オルドネス王は武勇の誉れ高き伯へ書状を送り、こう命じた——王国議會を開くゆえ、ただちに馳せ参じよ、すでに国じゅうから参集している、おまえ一人がきておらず、そのせいで開けないでいる——。いかねばならなかったが、伯はまったく気乗りがしなかった。王の手に接吻するのにとでも抵抗があつたのだった。

「天にまします主なる神よ、われを助け、カステーリヤをこの軛より脱せしめたまえ」

王とその家臣団は伯を丁重至極に迎えた。武勇の誉れ高き伯を総出で大歓迎。宿所まで送つていき、門前で挨拶をして帰った。老いも若きも町じゅうが伯の到着を心から喜んでゐた。ただ、王妃ひとりはいまいしさを抑えられずにいた。殺しても飽き足らぬほど伯を憎んでいたのだった。この王国議會へは数えきれぬほどの人々が参集していたが、伯の到着後、會議はほどなく終了した。武勇の誉れ高き伯が私的に、あるいは公の場で、その

都度的確な意見を述べたためである。

ドン・フェルナンド伯は羽がわりした鷹を持参していた。それはカステイリヤの名鷹であった。また、マンスールが乗馬としていた馬も引き連れていた。王はこの鷹と馬に垂涎し、なんとしてもわが物としたく思い、そこで伯に買い取りを申し出た。

「あるじよ、あなたに売るわけにはいかぬ。あなたはただお受けとりになればよい。売るのではなくご献上申そう」

王は伯に、もらうわけにいかぬ、鷹と馬は買い取りたい、もしも売ってくれるなら、その代金として財産から千マルコ渡そうと言った。両者合意に達して取引が行なわれ、代金支払いの期日が定められた。また、もしも期日に遅れば、例外なく一日ごとに金額が倍になることも。その場で割り符つきの契約書が作成され、そこに取り決めの内容があまりさず記され、末尾にはこの取引の場に居合わせた全員の名が証人として書かれた。人も羨む名馬を手に入れた王であったが、それから三年後、この取引はとてつもなく高いものとなった。返済金がフランスじゅうの富を総ざらえしても払いきれぬほどの額になり、それによりわがものであったカステイリヤ伯領を失ったのだ。議事がすべて終了し、王国議会が解散すると、カステイリヤの一行は揃って帰途についた。(……)

## 二二 シルエニヤ会談とナバーラ王の罠

伯が発つまえ、ドン・サンチヨの姉でレオン王妃である悍婦が、武勇の誉れ高き伯にある約束をした。それは罠であったが、結局は木兎<sup>うさぎ</sup>引きが木兎に引かれる始末となった。その計略は悪魔がにわかには吹き込んだもので、王妃が伯に縁組みを約束したのだった、姪をめあわせいくさを終わらせたい、そうせねば互いの損は計り知れぬと。武勇の誉れ高き伯はよい縁組とうなずき、喜んで話を受けようと即答した。王妃はナバーラへ使いを送った。口述してみせた書状に並んでいたのは偽りの文句。裏では次のように伝えていた。

「わたくし、ドニャ・テレーサより、あなた、ガルシア王へ。わたくしはあなたの父である王を亡くした。わたくしの愛してやまぬ人であった。わたくしがあなたのかわりに王であったなら、とうにかたきを討っているところだ。しかしいまや好機到来、あなたはわが兄の恨みを晴らすことができる。この謀によりあの身の程知らずの伯を虜とし、ふさわしい報いを与えてやるのだ。あの手強いカステイリヤ人を生かしておいてはならぬ」

この縁談を聞いて誰もが、願ってもない組み合わせ、和平への道、その礎になると喜んだ。だが、地獄の煤にまみれた悪魔が企みを巡らせていた。赴くべき会談の場所が定められた。すなわち双方が合意し、おのおの五人ずつを伴ってシルエニャに寄りあうことになった。そこで互いに話をし、意見を出しあうはずであった。フェルナン・ゴンサレス伯は家臣の中から五人を選んだ。いずれ劣らぬ忠義の士、間然するところなきインファンソン、人並みすぐれた家系に連なる勇者たちであった。(……) 彼らは取り決めを守ってシルエニャへ向け発った。つまりカステイリヤ伯を含む六人のみでそこへ至った。ところがナバラ王とナバラ人は約束を違え、六人ではなく三十人あまりでやってきた。ドン・フェルナンド伯は王がこうして大勢引き連れているのを見て、しまつたと臍を噛んだ。

「聖母マリアよ、助けたまえ！ 謀られた。約束を信じて裏切られた！」

伯は吼え、その声は雷霆のごとく轟いた。いわく、

「まさに世も末。王たる者のかくのごとき手ひどい裏切りにより、わたしはかの修道士の予言どおりの目に遭うのだ！」

伯はわが身の非運を呪いつつ、盾や槍を構える余裕もないまま、ある僧院へ逃げ込んで難を避けた。そうしてそこに朝から晩まで籠もって動かなかつた。伯の従士が忠臣ぶりを発揮した。正面の壁の中段に窓が切つてあるのに気づくと、僧院へ忍び寄り、玄関をよじのぼって伯らの剣を投げ入れたのである。それが、できる精一杯のことであった。伯に従いやつてきた従士らは、あるじを救出できぬと悟ると、みな急いで馬に乗って逃げ、カステイリヤへ急を知らせた。僧院はドン・ガルシア王により厳重に包囲されていた。神聖な場所といえど容赦は

なかった。しかし少しも王の望んだとおりにはいかなかった。武勇の誉れ高き伯は、門を固く閉ざしたのである。はや日は傾き、没しようとしていた。ドン・ガルシア王は使いをやり、降れば死一等を減じよう、誓うゆえそのつもりはないかと伯に質した。伯は身の安全の保障の誓いを受けたあと降った。こうしたたえようもない理不尽は神の怒りを買ひ、孔雀の鳴くような声が響いたかと思うと、祭壇が縦に真つ二つに割れた。今日この教会が二つに割れているのは、かつてこのような神変がその中で起こった事実起因する。思うに世の終わりまでこのままであろう。隠して隠せるような類いの出来事ではないからである。

しかるのちドン・フェルナンドは鎖をつけられた。そのとき伯はあまりの無念さに氣を失ったが、しばらくしてわれに返ると言った。

「世を統べる主よ、なにゆえわたしを見捨てたもうたのだ？ 主なる神よ、いくさ支度してナバーラ方と会う果報をわたしに望みたまうたのであれば、それを天の恵み、いつくしみと感謝したであろうにこのていたらしく。あなたに見放されたと感じている。もしもあなたが地上におわせば面罵するところだ。わたしはなにをした覚えもなく、見放されるいわれはない。このままでは悲運に泣き、惨めな死を迎えるはめになる。よしんばわたしがあなたの心に背いたとしても、もう十分報いはお与えになったはずではないか」

### 二三 カストロビエホ捕囚

武勇の誉れ高き伯はカストロビエホへ引いていかれた。殺しても飽き足らぬほど憎まれていたせいで手酷い扱いを受けた。ほどを知らぬ人々がほどを知らぬ仕打ちをした。それでもなお家臣らは伯から離れたがらなかった。伯はガルシア王にこう訴えた。

「あの家臣らを捕らえていても無益。わたし一人を捕らえていれば、家臣みなを捕らえているも同じ。彼らに構いたまうな。彼らに罪はないのだ」

ドン・ガルシア王は家臣らを解き放った。彼らがカステイリヤへ歸つて事情を告げると、かつて聞いたこともないような凶報に誰もが衝撃を受け、気が狂わんばかりになった。そうしてカステイリヤじゅうが嘆き悲しんだ。至るところ、喪服や頭巾が引き裂かれた。至るところ、額や頬をかきむしる姿が見られた。屈辱の思いがおのの心に深く刻まれていた。人々は泣き叫んだ、「われらは運に見放された!」と。そうして創造主への憤懣をこれでもかとはかりに言い募った。

「神はわれらが艱難辛苦から抜け出るのを欲せず、孫子の代まで奴隸であれと求める。われらカステイリヤ人は神に対し憤懣やるかたない。なにゆえわれらにかくも大きな苦しみを与えたまうのだ。われらはスペインじゅうから憎まれ、カステイリヤはあばら屋同然になつてしまった。それでもこの苦しみは、創造主に訴えるほかわれら術を知らぬ。創造主はわれらの声に耳を傾けたまはず。伯のもと、この苦しみから抜けられると信じていたのに、またもとの木阿弥になつてしまったが」

嘆き悲しむカステイリヤの人々からいったん離れよう。彼らのところへはいずれまた戻つてくることになる。彼らは寄り合つて方策を相談している。こうして鳩首協議させておこう。この人々のことはしっかり心に留めておかねばならぬ。いったん切つた伯の話へ戻ろう。伯はカストロピエホで獄に繋がれ、ナバーラ方の厳しい監視下にあつた。人がこれほど耐え難い幽囚の日々をしいられたためしはなかった。

## 二四 ロンバルディア伯とフェルナン・ゴンサレス伯の対面。この異国の貴人による王女の一件のとりなし

伯は曠古のつわものとの評判がこの地を覆っていた。伯に会つた者はことのほかの果報と喜び、いまだ会わぬ者は会うことを望んだ。ロンバルディアの名を冠するあるとりわけ誉れ高い伯が巡礼を思い立ち、家臣の中から選んで一大随行団を編成、サンティアゴへ向け出発した。巡礼の途上、そのロンバルディア伯はカステイリヤ

伯の居場所を尋ねた。すると虜となつてゐることや、どのようにしてそうなつたかなど、事実がありていに語られた——カステイリヤは大損害を被つていたので、伯は偽りをなんの疑いもなく信じ込んでしまった、家臣らも畏にかけるつもりなどなく、よかれと思つて伯を会見へ案内していき、そこであるじを虜にされてしまった、以来まる一年が経つ——。ロンバルディア伯は、どうにかしてカステイリヤ伯と会えぬか、ぜひ会いたい、会えれば自分になにかできぬものかわかるであろう、これほどの人物が獄に繋がれてゐるのは忍びない、と言つた。伯はカストロピエホへいき、門番に多額の礼を渡すと約束し、(……) 家臣二人だけを供として彼に会わせてくれぬかと頼んだ。伯は城へ案内され、門が開かれた。両伯は対面できたことを互いにおおいに喜び、長い時間話し込んだ。やがて話をやめて別れたが、ともに滄沱の涙の別れとなつた。獄に残つたドン・フェルナンド伯は、塗炭の苦しみに逆戻り。来る日も来る日もそれに耐えねばならなかつた。神よ、われを苦しみより救いたまへと願わぬときはなかつた。かのロンバルディア伯は、別れたあともカステイリヤ伯のことはなおざりにせず、この原因となつた王女を訪ねた。伯はその王女の夫となるという話だつたのだ。いざ訪ねてみると、目の前にあらわれたのは美しい乙女。この世の花と驚くばかり。伯はさつそく声を潜めて王女と密談した。あなたにもの申したいことが山ほどあると言つた。

「王女よ——と伯は話しかけた——あなたはまこと不幸な人。世の婦人の中であなたほど不幸な人はない。カステイリヤじゅうがあなたに対し、恨み骨髓に徹してゐるのだ、今の途方もない苦境はあなたのせいだ。情けもなく深き思慮もない王女よ、あなたには善悪いづれのふるまいも可能だ。伯を死の淵より救おうとせねば、カステイリヤはあなたのせいで滅ぶことになる。あなたはこれ以上ないほど異教徒を助けている、なにしろ伯は彼らがまつたく手も足も出ないようにしていた。あなたゆえにキリスト教徒はみな意気が萎えかけ、その分イスラム教徒は喜び勇んでいる。あなたの評判は地に落ちてゐる。このたびのことで多くの人々から指弾されるであらう。これが世に知れ渡つたらば、なにもかもあなたのせいになされてしまふであらう。もしもあなたがあの伯の妻となるなら、世の婦人になんたる果報者よと羨まれ、スペインじゅうから称えられるのは請け合ひ。かほど

見あげたふるまいをした婦人はあるまい。あなたが分別ある人であればそうするにしくはない。もしもこれまであなたが人に恋したことがなくとも、伯に心惹かれるのは疑いない、皇帝にすら見向きもせず。武勇にかけて世にあれにまさるつわものはおらぬ」

やがてロンバルディア伯はいとまを告げ、一行を引き連れてふたたび旅路についた。そうしてサンティアゴをめざし、巡礼の目的を果たした。他方、王女はもつとも信頼する侍女の一人に伝言を託し、ドン・フェルナンド伯のもとへ送り出した。ほどなくして侍女は、七転八倒のありさまとの窮状を訴える伯の言葉を携えて戻ってきた。王女への返事を携え飛んで帰ってきた侍女は、伯は苦しみに喘いでいたと告げた。

「伯の言葉を聞いてとても心が痛んだ。伯は天主に対しあなたを難じている、あなたひとりが自分の死を望んでいる、あなたが望みさえすれば自分は逃げられるのだと。あるじよ、腹心としての願い、伯を訪ね、安心させたまえ。あれほどの人を見捨ててはならぬ。ああして死なせてしまえば罪は大きい」

それを聞いて王女は侍女に答えた。

「侍女よ、よく聴くがよい。わたくしは幸せではない。伯の災いのいちいちにとでも胸が痛む。しかし、やがて時がきて伯の晴れやかな顔が見られるであろう。わたくしは伯のためあることをしようと思う。彼への強い愛に抗うまい。大死一番、会いにいくつもり。思いの丈を伝えるのだ」

## 二五 サンチャ王女による伯の救出

ドニャ・サンチャ王女はすぐさま城へいくと、さすが知勇兼備の人、なんのためらいもなく中へはいった。そして伯の姿を見て心強く感じた。

「王女よ——と、伯は言った——なにゆえここへまいられたのだ？」

「武勇の誉れ高き伯よ——と、王女は答えた——ここへきたのは愛のまことゆえ。女は愛ゆえに恥も怖れも忘

れ、愛する人ゆえに親きようたいも忘れる。愛する人の喜びこそなにもまさる喜び。伯よ、その耐え難い苦しみはわたくしへの愛のため。あなたはいまだなにも与えぬ者のため、耐え難き苦しみを味わう。伯よ、嘆きたまうな。おおいに安堵されよ。ここからあなたを助け出して苦しみを取り去り、胸を撫でおろさせよう。今すぐここから出たければ、この手の中に手を置き忠誠と臣従の誓いをされよ、わたくしを捨てて世のほかの女のもとへいかぬと。ともにミサにあずかり、結婚の祝福を受けられよ。もしもそれが嫌なら獄に繋がれたまま死ぬだけ。八方ふさがりとなり、死ぬまでここから出られまい。それに、気の毒なる人よ、もしも分別があるならお考えになることだ、おのれのせいでかほどの娘を失って惜しいか惜しくないか」

話を聞いて伯は助かったと喜び、そして内心で、すべてが早く叶わぬものかと呟いた。

「王女よ——と、伯は答えた——心からの願い。わが妻となりたまえ。わたしは夫となろう。誓いに背いてあなたを裏切る者は天に裏切られよ。正しき教えを信じぬ偽り者の汚名を着て死ぬがよい。頼む、王女よ、どうか口にした言葉を忘れたまうな」

そしてドン・フェルナンド伯は、称えるべき言葉をつけ加えた。

「あなたが言ったとおりにするつもりであれば、あなたがこの世にあるかぎり、誓ってほかに妻は持たぬ。言葉を違えたときは、聖母に言葉を違えられようとかまわぬ」

こうしたことをすべて誓いあつたのち、王女はただちにドン・フェルナンド伯を解放した。

「さあ、ゆこう。準備は万端整っている。誉れ高きドン・ガルシア王にみつかつてはならぬ」

フランス街道は諦めざるをえず、左へ逸れて一面に広がる櫟の森の中へいった。ドン・フェルナンド伯は歩くことができず、王女に背負われるようにして進まねばならなかった。夜が終わり朝がくるころになると、人目につくまゝに、見えてきた木々の密生した山へ向かい、分け入って、そこで夜を待った。



二六 邪な主席司祭

藪の中に潜む二人……。かたがた、これから神が彼らにいかに厳しい試練を与えたまうかをご覧になることになる。狩りに出ていたある邪な主席司祭の獵犬どもが、二人の跡を追つてそこへはいつてきたのであつた。すぐに犬どもは藪の中の二人のいる場所を嗅ぎつけた。伯と王女は絶体絶命の窮地に陥つた。他方、邪な坊主は悪巧みを思いついて舌なめずりした、アッコとダミエッタを手に入れてもこれほど喜びはしまいというほど。

首席司祭は二人の姿を見ると言つた、このように、

「裏切り者のご兩人、もはやこれまで。誉れ高きドン・ガルシア王からは逃げられまいぞ。二人、無残な死を遂げる定めだ」

伯は手を合わせた。

「後生だ、情けをかけてわれらのことは黙つておいてくれぬか。カステイーリヤの中央の町をひとつ与え、永代あなたの所領としよう」

信心なき偽り者は冷酷無比、猛犬にも劣らぬ情け知らず。

「伯よ、黙つていて欲しければ、王女を貸して思いどおりにさせることだ」

このような無体な求めを聞いた伯の無念は、槍の一撃を受けるのにまさるとも劣るまい。伯は言つた。

「理不尽にもほどがある。わずかな働きに途方もない見返りを求めるのか」

王女は坊主頭に対して畏をしかけた。

「主席司祭よ、喜んであなたの意に沿おう。さすればわれら、身も伯領も失わぬ。失うぐらいであれば、のちのち三人で罪の償いするほうがまし」

それから王女はつづけた。

「裸になるがよい。服は伯が見ていてくれる。伯が見るに堪えぬものを見ずに済むよう、主席司祭よ、離れた

場所にしてくれぬか？」

主席司祭はそれを聞き、涎を垂らしてほくそ笑んだ。この恥知らず、信心なき偽り者は、他人相手にうまくやろうとして、かえってしてやられたのであった。

二人で少し離れた場所へいった。主席司祭はすぐに思いが遂げられると信じ、王女を抱こうとした。両手を広げ体を抱きしめにかかった。ドニヤ・サンチャ王女はこのほか慎重な人ながら、また比類なく大胆でもあった。相手の髪を掴むと一気に引き倒して言った。

「犬畜生殿よ、思い知るがよい！」

太い鎖をつけられて歩くのがままならず、王女を救えなかった伯であったが、ここに至って短剣を手にとり、いき、王女と二人でその悪僧の息の根を止めた。かくして邪な者は果てた。(創造主よ、けっして彼に恵みを与えたまうことなかれ。) 神意によりラバと衣服と羽がわりした鷹が、遙かに立派な持ち主のものとなった。ラバはひとまず一日じゅう繋いだままにしておいた。やがて日が暮れ夜が訪れた。二人はすっかり暗くなるを待って、石畳の道を人目を憚らず歩きはじめた。

## 二七 カステイリヤ人による棟梁救出の企て——伯との再会

道をゆく二人。めざすカステイリヤは指呼の間。二人から離れ、カステイリヤ人、この剽悍な人々について語ろう。彼らはなにひとつ合意できずにいた。これがよいと誰かが言えば、いや、こちらのほうが別の者が異を唱える。棟梁なき一党、意見の一致は困難を極めた。生まれながらの知者にして、武勇に秀で忠義の心厚い騎士ヌニョ・ライネスが口を開いた。彼が話しはじめたのは、誰をもうなずかせる卓見であった。

「硬い石で伯に似せて瓜二つの像を作り、これをわれらの棟梁とし、それに一同で誓おうではないか。伯と違って手に接吻するのだ。そうしてそれを車に載せ、押し立ててゆこう。武名高き伯への忠義の印に像を棟梁としよ

う。それに一同で忠誠と臣従を誓おう。像が逃げぬうちはわれらも踏みとどまろう。伯を連れて帰らぬかぎり、二度とふたたびカステイリーヤの地は踏むまい。勝手に戻る者は裏切り者と見做そう。カステイリーヤの旗を像の手に持たせよう。伯は強き人。さればわれら、強き棟梁を押し立ててゆくのだ。カステイリーヤ伯を迎えにゆこう。しかるのちはみなであちらに居座るか、さもなくばこちらへ伯を連れ戻すか。ぐずぐずするは名折れの極み。われら、カステイリーヤ伯を仰ぎ見てやまぬ。伯の名は日々高まり、われらは名を失つてゆくばかり。伯は孤軍奮闘し、われらはいつまでも手を束ねているかのごとくだ。ドン・キリストよ、罪深きわれらを赦したまえ。考えてもみよ、われらがひとりの騎士にいかにか頼っているか。われらはゆうに三百人、伯はただ一人。されど、伯なくばわれらは木偶の坊になり果ててしまう。名などたちまち潰え去るものだ」

ヌニョ・ライノが考えを述べおえると、誰もが心底得心した。武名高いインファンソンらが間髪を容れず口々に叫んだ。

「われら一同、同意する。まこと道理に適う考え」

そこで今しがたの意見に従い、伯に似せた瓜二つの像を作った。そうしてそれを、とりわけ頑丈な材木でこしらえた車に載せた。こうして準備を整えおえると出陣。誰もがみな石像に誓い、本物の棟梁同然にそれを護持した。一行はナバーラへ向かう道を取り、一日目の終わりにアルランソンに着いた。翌日この勇者の団は、誉れことのほか高きあるじを先頭に立て、栄光に輝く旗を掲げ、モンテス・デ・オカの険しい山道を踏み越えた。カステイリーヤ軍といえどスベインきつてのつわもの、精兵揃いであるのが常。カステイリーヤの騎馬武者隊、この艱難辛苦を耐え抜いてきた人々は、やがてペロラドへ達し、そこで二晩目をすごした。ここでの宿営は予定どおりの行程であった。次の日は未明に行軍を再開。一レグアもいかぬうち、夜のとばりがあがり明るくなった。一方、王女と連れ立って困難な逃避行をつづけていた伯。彼らの旗を見やうと総身の毛がよだつた。先にみつけて震えあがった王女が、とっさに告げたのだった。

「伯よ、どうすればよい。大きな旗が見える。わたくしには何色か見分けがつかぬ。兄の旗であろうか、それ

ともモロのマンスールの旗か」

二人は頭を抱え、立ち往生してしまった。見渡しても森はなく、どこへ逃げ込みようもなかったのだ。二人は焦った。どうすればよいかわからなかった。なにしろ身を隠す場所がどこにも見あたらなかったのである。これほど追い込まれた気持ちになったのは、生まれて初めて。森に身を隠せるものであればそうだった。そうできれば、せめて山小屋にでも身を隠せたであろう。伯は旗を凝視し、何者の一団か見極めようとした。そうして甲冑によりキリスト教徒とわかった。また、異教徒でないうえにナバラ勢でもない。伯は知った、あれはカステイリヤ勢、あるじを異国の人々の手から取り戻しにきたのだと。

「王女よ」と伯は言った。「心配無用。あの人々は争ってあなたの手に接吻するであろう。あれはわが旗、目に映る甲冑姿のあの人々はわが一党。今日あなたをカステイリヤ人の棟梁の妻としよう。あなたを迎えて誰もが喜び勇むであろう。老いも若きも、あなたの手に接吻しようと列をなすにちがいない。カステイリヤの地であるに城と領地を与えよう」

不安に思い、生きた心地もなかった王女であったが、伯の言葉を聞いて胸を撫で下ろし、かつ喜んだ。無事カステイリヤへ着いたと知ったときは、よくぞ導きたもうたと神に感謝を捧げた。人々が伯を出迎えるのに先立って使いが送られ、以下のように告げられた、伯が欣々然として満足げな様子で帰ってきている、王女を連れている、ただ憔悴しきっていると。棟梁の帰還の知らせを聞いたカステイリヤの人々は、それが事実であることを疑わなかった。皆、手の舞い足の踏むところを知らず。誰もが喜び、神に感謝を捧げた。夢かと思うほどの大きな喜びであった。人々は力の限り駆けに駆けつけた。そうして遠目に伯と認めると、そばまで駆け寄って抱きしめた。ついで、われもわれもとわが棟梁の妻の手に接吻しにいき、こう言った。

「いまやわれらカステイリヤ人は富める者となった。ドニヤ・サンチャ王女よ、あなたはよき時に生まれたおかた。さればわれらみな、あなたを棟梁の妻としてお迎えしよう。あなたはわれらを助けてくださった。かほど大きな助けは覚えがない。(……)それがどれほどありがたかったか口で言おうにも言うことができぬ。(……)

あなたがおわさねば伯を取り戻せなかったのは確実。あなたは脱しがたい幽囚よりカステイリヤを解き放ちたもうた。あなたがキリスト教世界全体にとっておおいなる救いとなり、イスラム教徒の悪夢となつたのは疑いを容れぬ。栄光の玉座にある王者キリストが、あなたにしかるべく報いたまわんことを」

みな、そしてそれとともに王女も、うれしくてたまらず泣いた。死んで生き返つたものと同じと感動した。天にまします王を祝福し賛美した。それまでの涙は大歡喜に変わった。一同打ち揃つてペロラドへ引き返した。それは伯領の端の町。急ぎ腕のよい鍛冶屋が呼ばれ、ドン・フェルナンド伯の鎖が外された。

## 二八 伯の婚礼

それから二人は一路ブルゴスをめざし、到着後、日を置かず盛大に婚礼を催した。先延ばしせず祝福を受けた。老いも若きもみな喜びに沸いた。貴族はこぞつて城崩しに興じ、従士はチェッカーやチェスを楽しんだ。他方、勢子は牛を殺し、多数の樂人がチターやヴィウオラを奏でた。それはそれは賑やか、これ以上ないほどの賑やかさ。カステイリヤの人々は、ひとつならぬ二つの祝いごとを行なつていたのであつた——ひとつはあるじを取り戻した祝い、もうひとつは二人の婚礼の祝い。

## 二九 ナバール王ガルシアのカステイリヤ侵攻と伯の捕囚

祝いの途中、はじまつてまだ一週間と経たぬとき、ドン・フェルナンドへあらたな一報がもたらされた——ガルシア王が雲霞のごとき大軍を率いて向かつてきている。ただちに伯は人々にいくさ支度をさせ、整うと迎え撃ちに向かった。すなわち伯領の境へ向かい進軍した。全軍一丸となつて戦う必要があつた。いくさ場へ着くと、迅速に動いて陣形を作つた。軍勢の指図は伯の役割。手慣れた務めであつた。一方、ナバール王も満を持して出

陣してきていた。両軍のあいだで激戦が開始された。文書にはこうある。文書は以下のように伝えている。一進一退の攻防が半日あまりつづいた。両軍とも疲れ、戦いに飽きた。が、やがてナバーラ軍は雪辱を果たす寸前となった。カステイリヤ方の多くの将兵を討ち取り、圧倒した。投げ槍や槍で激しく攻め立て、短時間のうちにおびただしい血を流させたのである。ドン・フェルナンドは味方が劣勢に立たされ、疲れて全体の士気が下がっているのを感じ、激しく叱咤した。

「われらのせいで、今世にある者もやがて生まれくる者らも、今日ごとく破滅へ至るのだ！ おまえたちはかくして務めを擲ってしまうつもりかもしれぬが、わたしが否でも応でも勇者にしてやろう！ 今日わたしが死ねば、おまえたちは生まれてこぬほうがよかったと後悔するはめになる。あるじに死なれて不忠者と知れ渡ることになるのだ！」

人々はこの伯の叱咤を聞き流さず言った。

「この場で枕を並べて討ち死にしようではないか。ドン・フェルナン・ゴンサレス伯にこのありさまを詰めるのは耐えられぬ。ついぞ犯さぬあやまちを、いまさら犯すまい」

退かぬ覚悟を決めた人々は、いくさ場へ戻って突撃を開始。多くの馬から乗り手を奪った。剣戟の音が遙か遠くまで鳴り響いた。名を惜しむ勇者たる伯は、妻の兄が原のただ中にいるのを認めた。伯は槍を握りしめ、彼に対峙して叫んだ。

「二騎打ちでいくさの決着をつけようではないか、義兄よ<sup>あに</sup>」

よく知る敵どうしである二人は、殺気を漲らせ、槍を構え、槍旗を翻して突進。やがて猛烈な勢いで相手の盾を突いた。カステイリヤの棟梁の繰り出した強烈な一撃に、たまらずナバーラ王ガルシアは落馬した。槍が深々と胸に突き刺さり、穂先が背中から突き出ていた。ドン・フェルナンド伯はナバーラ王をねじ伏せて捕らえた。ナバーラ方は王を助けられなかった。王はかのブルゴスの町へ連行され、到着ののち伯の指示で鎖に繋がれた。そのまままる十二ヶ月が経った。このうえなく過酷な虜囚の日々であったが、カステイリヤ側はいかなる

捕虜との交換にも頑として応じなかった。彼らが虜囚をつらいものとしたのは異とするに足りぬ。しかし伯夫人には耐え難かった、自分がドン・フェルナンド伯の妻であるにもかかわらず、血を分けた兄であり、かつ名君で治世ことのほかめでたかつた人を、虜囚の身に置いて苦しめておくなどとは。夫人はついにカステイリヤの人々と話した。簡にして要を得た話しぶりであつた。

「カステイリヤの人々よ、王を虜囚の身から解き放とうではないか。今わたくしはナバーラの人々から責められているのだ。わたくしはドン・フェルナンド伯を幽囚から解き放つた。しかるに伯は今なにゆえわたくしに對し、かほど貴族らしからぬふるまいをする？」

伯夫人ドニャ・サンチャ、父親であるナバーラ王の解放をカステイリヤの人々に求める。彼らのとりなしにより、フェルナン・ゴンサレス伯は虜囚の身のその人を、礼を尽くして国へ送り返す。

(……) 父親が虜囚の身となつてすることにひどく心を痛めた伯夫人ドニャ・サンチャは、カステイリヤの人々と話をした。そのとき彼女はこう言つた。

「卿らよ、卿らの棟梁である伯は、わが父ドン・ガルシア王の虜であつた。卿らも知るとおり、それを助け出したのはわたくし。だが、それにより父やナバーラじゅうの人々から激しく責め立てられている。今日のこの苦境をわたくしのせいと考えているゆえだ。今、伯はわたくしに對しひどいあやまちを犯している。父を引き渡そうとするどころか、虜囚から解き放ちさえせぬ。それゆえあなたがたに頼みたい。賢明に判断し、伯に願つて欲しい、懇願して欲しいのだ、父をわたくしに引き渡すようにと。むろん頼みを聞いてくれれば一生恩に着る。卿らへは、これまでなにも頼んだことはないはず」

カステイリヤの人々はいかにも承知と答え、ただちに伯のもとへ赴いて言つた。

「棟梁よ、あなたの賢明さを見込んでの願い、われらの話をお聴きあれ。お頼みする、棟梁よ、なにとぞお聞き入れ願いたい、ドン・ガルシア王を娘のドニャ・サンチャへ引き渡すこととし、解き放ちを命じてく、ださうか。さすればあなたはまこと正しき行ないをしたことになり、人がそれを知ればかならずや褒めるであろう、いうまでもないが、われらもあなたも王女には大恩ある身。そうして、棟梁よ、もしもそうせねばかえってあなたのためにはよくないかと」

人々は懸命に伯を説いた。懸命に道理を説き、恩義を説いた。そうして伝記が以下で述べるようなことを承知させ、行なわせた。すなわち伝記にいわく、そのとき伯は、卿らがよいと考え、望むのであれば、たとえそれ以上のことでも行なうのにやぶさかではないと答えた。伯はただちにドン・ガルシア王の鎖を外させた。それからフェルナン・ゴンサレス伯、伯夫人ドニャ・サンチャすなわち王の娘、カステイーリヤの貴族一同総出でドン・ガルシア王を下にも置かず歓待。手厚くもてなした。やがて伯は王やその家臣らに衣服、馬その他必要なものを十分に与え、国へ帰した。

王は帰国後エステリヤへ向かった。そして国じゅうの貴族へ使いを送り、同地で御前会議を開いた。集まった人々を前に王は言った。

「卿らよ、一同知るとおり、わたしはフェルナン・ゴンサレス伯に恥辱をこうむった。わが恥辱は卿らの恥辱。よく承知しておくがよい、わたしにとっては恥辱を晴らすか、さもなくば死ぬ（……）」

レオン王ドン・サンチョ、イスラム軍に国を侵されて町を囲まれ、フェルナン・ゴンサレス伯に救援を求める。

こうしたことのあと、レオン王ドン・サンチョがフェルナン・ゴンサレス伯へ使者を送り、雲霞のごとき大軍を率いたコルドバ王アブド・アッラフマーンに国を侵されていると伝え、助勢を頼むと矢の催促をした。使者



の口上を聞いたフェルナン・ゴンサレス伯は、一刻も早く駆けつけようと、常の手勢の騎馬軍団を率いて急行した。同時に使者を伯領の四方へ送り、書面や口上で、その場にいなかったほかの騎馬武者全員に対し、あとにつづけと命じた。レオン王は伯の顔を見るとひとかたならず喜び、大歓迎した。よくぞ遅れず駆けつけてくれたと感激したのであった。一週間後、伯の軍勢が勢揃いした。このあと衆議一決し、三日後に野に打って出てイスラム軍に決戦を挑むことになった。籠城よりも上策と判断したため(……)

三〇 コルドバのイスラム王がティエーラ・デ・カンポスを略奪。そのあとフェルナン・ゴンサレス伯がイスラム軍を追いまくり、略奪されたものを奪い返す。

伯が大騎馬軍団を率いて駆けつけたとの報がイスラム方へ届いた。コルドバのイスラム王は、すぐその日のうちに町の囲みを解いて矛先を転じた。陣をたたみ、サアグンを囲みに向かったのであった。そうしてティエーラ・デ・カンポス一帯を限なく駆け、略奪してまわった。その報に接した伯は、手勢を残らず引き連れ出陣することを決意。一騎当千のつわもの揃いであったレオン勢も、伯を守護すべくともに出陣しようとした。が、伯はそれを望まず引き返させた。レオンの人々はこれを深く恨んだ。ドン・フェルナンド伯がすべての手勢とともにサアグンへ着いてみると、町はすでに包囲されていた。伯は敵に激しく襲いかかり猛烈に攻め立てた。これによつて町の囲みはその日のうちに破れた。ティエーラ・デ・カンポスじゅうが荒らされ略奪されていた。あまたの人々が捕らえられ連れ去られようとしていた。加えて牛馬その他の家畜も無数に、数えきれぬほど奪われようとしていた。阿鼻叫喚すさまじく、祖父母、親、子、みな捕らえられ、母親は膝の子もろとも、父親は子もろとも殺された。イスラム軍は莫大な分捕りに喜び満足していたものの、進むのもままならぬほど疲労困憊していた

せいで、武勇の誉れ高き伯に容易に追いつかれてしまった。迫りくる伯の姿の前に、兵卒の端に至るまで激しく動揺した。伯は獲物に襲いかかる荒鷲さながら、わずかな余裕も与えず電光石火攻め入った。イスラム勢は、「カステイリヤ！」という喊声が聞こえたとき、コルドバへ飛んで帰れるものなら飛んで帰りたいと動揺した。分捕ったものは、たとえ手放しがたくとも、その場に捨てていかねばならなかった。先んじて逃げおおせた者は幸運と感じた。その運の薄かったコルドバ王は、ようやく逃げきったとき、ムハンマドに感謝を捧げた。神算鬼謀の人、知恵に秀でたドン・フェルナンド伯は、異教徒に大鉄槌をくだした。彼らに襲いかかり、思うさま討ち取った。奪ったものもなにひとつ持ち帰らせなかった。だが——討ち取った者ばかりは無理ながら——生け捕りにした者には全員帰国を許してやった。イスラム教徒らは口々に言った。

「フェルナン・ゴンサレス、神があなたを王となさんことを！」

ドン・フェルナンド伯は、奪われたものをそれぞれの持ち主へ返してやった。伯とその軍勢はまこと輝かしい遠征を行なった。このち武勇の誉れ高き伯はレオンへ帰還した。

### 三一 伯に対するレオン人の敵意。伯による鷹と馬の代金の請求。

帰ってみるとレオン人は憤懣やるかたない様子であった。伯に同行を拒まれたのを根に持っていたのである。レオン人とカステイリヤ人は口を極めて罵りあった。そのとき、悪魔どもが彼らを支配しようとしていたのは疑いを容れなかった。ナバーラの人であるレオン王妃は、殺しても飽き足らぬほどカステイリヤ人を憎んでいた。弟を殺され恨み骨髓に徹していて、カステイリヤ人の命を奪うことのみを、ひたすら念じていたのだった。王妃はカステイリヤ人に屈辱を与えようとの執念に燃え、レオン人に彼らとの戦いをけしかけた。できることなら弟の恨みを晴らしたかったのだが、こればかりは誰も王妃を責められまい。王妃は双方に十分火が点いたのを見て取るとほくそ笑んだ。悪魔が企みの大きな大きな布を織りあげていた。しかし誉れ高き王によ

り争いは抑えられた。レオーン人とカステイリーリヤ人は相互に相手から激しく罵られ、みな互いに挑み挑まれていた。やがてカステイリーリヤ人は本拠地へ引き揚げ、このあと二年のあいだ御前会議へは出向かなかった。その一方で、武勇の誉れ高き伯はレオーンへ使者を送り、未払いの代金を請求した。ドン・サンチョ王の返答はこうであった。

「わが近習らが徴税からまだ戻らぬ。戻りしだい真つ先に伯に支払うつもりだ」

使者は伯のもとへ帰つて報告した——喜んで支払いたいところだが、しかしいまだ税が納入されておらぬゆえ遅れてしまつてゐるのだとの王の仰せ——。伯は支払いが大幅に遅れると聞き、わが意を得たりと喜んだ。望みのものが手にはいると読んだのであった。というのも、支払いが遅ればそれだけ多く受け取れるため、期日が過ぎるのは大歓迎だったのである。他方、誉れ高きサンチョ・オルドネス王は悠々然とかまえていた。さて、期日がきてから三年が過ぎた。その間返済金は莫大な額にふくれあがつていた、たとえヨーロッパじゅうの人間が束になつても返せまいほどに。ここでサンチョ・オルドネス王から離れよう。やがて王は武勇の誉れ高き伯へ返済金を送るが、ドン・フェルナンド伯は受け取りを拒み、どういう約束になつていたか伝えることになる。

### 三二 ナバーラ王ガルシアの捲土重来。バルピレの戦い。

こうしたあれこれはひとまず置いて、ナバーラへ戻ろう。依然ナバーラ人から目を離すわけにゆかぬ。文書で読むところに従い、いったん話を切つた場所、エステリヤからまた語りはじめよう。

ナバーラ王は宮廷にあつた。(……) 群臣を前に、ドン・フェルナンド伯から無体な扱いを受けたと烈火のごとく怒つてゐた。王は言つた、無礼者の伯めにさんざん無体な目にあわされた、それをこのままにしておいてなるものか、彼に対して望むものはほかにない、恨みを晴らすか死ぬかだ。

王は全軍を率いてエステリヤを進発し、カステイリーリヤへ侵入すると、荒らしまわりはじめた。そのとき伯は

レオーンへ出向いており、対抗する者がいなかった。ナバーラ王はブルエバ一帯、ピエドラ・ラダ一帯を荒らし、うるわしい土地と評判の高いモンテス・デ・オカ、小麦が豊富に蓄えられたウビエルナ川流域を荒らしまわったあげく、ブルゴスの城門の前に陣を張った。連れ去れるものなら伯夫人を連れ去り、伯をあざ笑いたかった。だが夫人は(……)、そしてわが身をよく守った。(……) ガルシア王は伯領を荒らしまわって数多くの物、数多くの家畜を奪った。こうして山のような戦利品とともに国へ帰還した。しかし、ほどなく王は大きな代償を払わされるはめになる。

ドン・フェルナンド伯がカステイリヤへ戻ってみると、領国は荒らされ略奪されたあと。人も家畜も多数連れ去られていた。(……) ドン・フェルナンドはただちに使者を送って厳しく迫った、持ち去ったものを返さねば、ナバーラへ攻め入り家畜を奪い返すつもりだ、そのとき誰か前に立ちはだかれる者があるか拝見しよう、と。使者はガルシア王のもとへいき、しかるべく役目を果たした。そのときの王の返答は、びた一文返すものか、かかってくるなら望むところだ、というものであった。どちらも迅速に行動し、大至急軍勢を集めた。双方とも大軍が集結。やがて王とドン・フェルナンドは互いを求めて出陣した。両軍はある深い谷で対峙した。そこは兎のよい狩り場、臘脂の染料になる貝殻虫の宝庫。谷底を白波立つエプロの奔湍激流が貫いていた。今日そこはバルピエレと呼ばれるが、これは当時も同じであった。王と伯はそこで相対し、互いに相手に向かって進撃した。かくして激しい野戦が開始された。倒すか倒されるか乾坤一擲の大勝負。ために血で血を洗う熾烈きわまりない戦いとなった。伯も王も死力を尽くした。両軍とも力の限り戦った。凄まじい攻防であったが、それより遙かに凄まじかったのは剣戟の音。人の叫び声も聞こえまいというほど。もし聞こえたとすれば、大雷鳴と等し並みの声の持ち主であつたろう。個々の声はむろんのこと、大喊声すらかき消されていたにちがいはなかった。渾身の力を込め、岩も砕けよとばかり振るわれる槍や剣。互いに力を振り絞った。いたるところで人が地面に突き落とされ、二度と立ちあがらなかつた。血が幾筋もの川となつて流れ、大地を広く覆った。ナバーラの騎馬武者はつわもの揃い。いついかなるときであれ、なるほど勇者と人もうなずく誇り高き騎馬武者の中の騎馬武者。しかし伯の前に立て

ば、ことごとくその餌食となつた。この強さは天の賜物。伯は武勇の誉れ高く無敵であつた。(……)

レオン王が伯へ使者を送り、御前會議へくるか伯領を返上するか二者択一を迫る。

このレオン王ドン・サンチョの治世となつて七年がすぎた。これは九七一年にあたる。またこの年は主の受肉から九三二年目、ローマ皇帝ハインリッヒの治世の十六年目であつた。

前述のように、フェルナン・ゴンサレス伯はドン・ガルシア王を敗つて伯領へ凱旋した。その伯のもとへレオン王から書状が届き、そこには御前會議へくるか、さもなければ伯領を返上せよとあつた。王の送つてきた書状を読んだ伯は使者を派し、カステイリヤじゅうのリコ・オンブレその他の貴族を召集。集まつてきた人々を前に次のように言つた。

「二党の人々よ、一族の面々よ、わたしはみな地の生えのあるじ。あるじに進言するのは忠臣の務めだ。ひとつ意見を聞かせてもらいたい。レオン王から書状が届き、その中で伯領を返上せよと言つてきた。されば返上してもかまわぬ。無理にわがものとしておくのは正しくあるまいし、仮にそうしたとなれば王はよい口実を得て、わたしのみならず孫子までも誇るに相違ない。それにわたしは土地を横領するような男ではない。そもそもさような悪事などせぬのがカステイリヤの流儀。もしもレオン王に対しわれらが土地を横領したとの評判がスベインじゅうで立つたなら、それゆえに、これまで打ち立ててきた勲しは、すべて無に歸してしまふであらう。なぜなら、たとえ人間、百の善を行なおうとも、のち、ただの一度でもあやまれば、前の百の善は語られず、そのただひとつの悪を責められるはめになる。これはひとえに妬み心のなせるわざ。およそこの世に生まれた者で、他人を見る目に偏りなき者はない。ゆえに人はときに大悪を善と言ひ、善を大悪と言ふのだ。艱難辛苦に耐え、天の思召しにより思いもよらず得たこの果報、かくして失えばわれらのこれまでの苦勞、すべてが水の泡とならう。常に忠誠を誇りとしてきたわれら、これからも永劫それを貫かねばならぬ。それゆえわたしが御前會議へ

出向くことにつき、一同の賛同が得られればさうしようと思う。出向けばわれらは謗られまい。一党の人々よ、家臣たちよ、面々は今わたしが述べた胸の内を聞いた。これにまさる考えがあれば、どうか聞かせてもらいたい、わたしがあやまればみな大きな罪ともなるのゆえ。

あるじにとってなによりありがたいのは、よき進言してくれる家臣。いくさ働きのよい者よりも、遙かに役に立つからだ。なにせ物事のなるならぬは進言しだい。あるじは折に触れよく意見を聞いて、誰かの掘った落とし穴にはまらぬよう努めねばならぬ。ただしあやまつた進言に耳を貸せば、いかにもがこうと、もはや取り返しのつかぬ大きなあやまちを犯しかねぬ。よき進言持つ者はあるじに対し、怖じず気後れせず事実ありのまま、あるいは正しいと信じることを言わねばならぬ。だが、中には進言するどころか阿諛追従を常として、あるじが喜びそうだと思うこと、みなが最善と口を揃えることのほか、なにひとつ言おうとせぬ者、言えぬ者がある。かような輩はこれにより途方もない罪を犯すのを免れぬ、なぜなら立派な人物が悪しき進言に乗せられ、転落する場合があるからだ。だがあるじによき進言したければ、まずは物事全体をありのままに見ねばならぬ。あるいは、それがとどのつまりどこへいきつくかを考えねばならぬ。加えて党派心に捕らわれておらぬかも、心の内にて用心せねばならぬ。さらには怖れにも、気後れにも、それがいかに強かろうと敵意や好悪の情にも、贈り物にも、なにかの約束にも屈してはならぬ、あるじに正しき進言したいと思えば。いちいちこうして語ってみせるのは、みながせつかく得ている名をば損なうはめになつてはならぬゆえ。物事をしくじり、失うに至つた名をば取り戻すのは至難のわざ。一同よ、忠義を忘れぬのはとりわけたいせつ。たとえ肉体が消え去つても、犯した悪事は未来永劫消え去らず、さらには子々孫々に至るまで、そのまつたくありがたからぬ遺産を受け継ぐはめになる。

わたしは面々が正しくふるまい、あやまちに陥らぬ道を詳らかに示した。それというのもほどなく面々が苦境に陥り、知勇を発揮せねばならぬ日のくるのが、この目にはつきりと見えるからだ。みなが知るように、わたしは王に蛇蝎のごとく嫌われている。それゆえわたしは虜とされるのを、あるいは責め苛まれるのをかならずや免れまい。みながいかにしてわたしを救うか、いかなる知恵を発揮して助け出してくれるか、かの地で見届けるつ

もりだ。言つておくが、御前会議へ赴かねば、軍勢を差し向けられても不思議はない。だが一同もよく知っており、罪ある者が戦うのは禁物。なにせ天佑神助が得られぬからだ。それに、わたしが道に背いたせいで、のちのち一族が誇りを受けるぐらいであれば、死ぬか虜となつたほうがまし。一同がよいと言うならかようにしたく思う。ただちに発つつもりでいる。わが息子ガルシアのことはよろしく頼む」

これだけのことを言うと、伯は人々に別れを告げて旅立つた。供に連れるはわずかに七騎。やがてレオンへ着いたものの、出迎える者はなく、伯はこれを悪い前兆と見た。翌日伯は王宮へ赴き、王の手に接吻しようとした。しかし王はそれを許さず言つた。

「下がれ、伯よ。無礼千万、なにゆえまる三年も御前会議へ出てこなかつたのだ？ おまけにわが手から伯領を奪い取つた。されば軍勢を差し向けられても文句は言えまい。これをのけてもわが意に染まぬ所業、道に外れた所業に幾たびも及び、しかも一度として償わぬ。この借り、利息をつけて返さずに、この場を去れる望みは万に一つもないと、そう思え。されどわたしへの無礼の数々、御前会議の指図に従い償うというのなら、しかるべき保証人を立てるがよい」

王が言いおえると伯は答えた。分別も知恵もすばらしく備わつた人の言葉ながら、このときばかりは少しも役に立たなかつた。次のように述べたのだつたが――

「あるじよ、あなたはわたしが土地を奪つたと詰りたもうた。身に覚えのないことだ。そもそもさような所業は、わたしが住まう土地の流儀ではない。なにせわたしは忠義、ふるまい、なんら欠けるところなき者と自負しているのだ。ところがさきには、レオンの人々から耐え難い辱めを受けて帰つた。御前会議へ参上しなかつたのはそのためだ。とはいえたといえ伯領をわがものとしても、道に外れたことにはなるまい、しかるべきわけがあるのゆえ。なにせあなたはまる三年もわが財をとりあげたまま。いかなる約束を交わしたかは覚えてゐるはず。それにつき、あなたとわたしで作つた証文もある。そこには、期日までに代金を渡さねば、日ごと額が倍になると定めてある。わが財の代金につき、証文どおりの支払いを保証するための人を立てたまえ。こちらも同様に誰

かを立て、わたしが御前会議の指示に服し、あなたがわたしに持つ不満、それを残らず解消するのを保証してもらおう」

王は伯に激怒し、その場で伯を捕らえさせ鎖に繋がせた。

### フェルナン・ゴンサレス伯の脱出

伯が虜となったと知ったカステイリヤの人々は、大きな衝撃を受け、それゆえ、まるで伯が死んで眼前に横たわっているかのごとく嘆き悲しんだ。伯夫人のドニャ・サンチャもまた、知らせを聞くと気が遠くなつて床にくずおれ、その日長い時間死人のように横たわつた。後刻正氣に返つた夫人に人々は言った。

「夫人よ、泣き喚いてどうなるのだ。泣き喚いて、伯のため、われらのため、なんになる。それよりみなで、なにか伯を取り戻す方策を考えるほうが先、力づくであれ、策を用いるのであれ、なんによるのであれ」

なるほどそのとおりということになり、そこで伯を救い出す方策について熱心に話しあつた。その際おののよいと思う考えを述べたが、それでも依然、首尾よくことをなし遂げるための妙案は浮かばなかつた。なにかを望むとき、人の心はそれを果たす道がみつかるまでかたときも静まらず、どうすればよいか考えつづける。こうして難しいこともやがて容易に行なえるようになる。一念岩をも通すゆえである。棟梁たる伯を、虜囚の身から助け出したいと強く願つていたカステイリヤの人々は、これ以上ないと思える策を思いつくに至つた。やがて凜々しい騎馬武者姿となつた五百騎が集結。伯夫人と行をともし、伯の救出を試みることを全員で尊い福音書に誓つた。こうして誓いを済ませたあとカステイリヤを進發。夜行軍であつた。また、人に見られたりみつかりせぬよう、街道は使わずそれから離れた山や谷を進んだ。やがてマンシリヤ・デル・カミーノへ至り、それを右に見て通り過ぎソモーサへ登ると、顔前に広がるのは鬱蒼とした森。軍勢はそこを夜営地とした。

ドニャ・サンチャ伯夫人は人々をそこに留まらせ、みずからは首から小さな籠を下げ、杖を手に巡礼姿となつ



て、騎馬武者二人だけを伴いレオンへ向かった。夫人は王にサンティアゴ巡礼の途中と言いつつ送るとともに、伯との面会の許しを願ひ出た。王は人を差し向け、喜んで許すと返答し、みずから大勢の騎馬武者を引き連れ、まる一レグアも町から出てきて迎えた。それから揃つて町へ引き返したあと、王は住まいへ戻り、夫人は伯に会いにいった。夫人は伯を見ると寄つていつて抱擁し、滂沱と涙を流した。そのとき伯は慰めて言つた、悲しむな、艱難辛苦はまさに神が人に与えたまうもの、王や貴族がかような目に遭うのは珍しくないのだ、と。後刻、夫人は王のもとへ人を遣わし、足を縛られた馬はどうあがいてもうまく子はなせぬと訴え、あなたを賢明にして心やさしきお人と見込んでのせつなる願い、伯の鎖を外させたまえと伝えた。すると王は「なるほどそれは道理」とうなずき、鎖を外すようその場で命じた。

そののち伯夫妻は同衾して夜通し愛しあつた。また、そのとき二人のなすべきことについてじつくり語りあい、天のお導きを得られれば、事前の目論見に従ひあれこれを、これこれこういう具合に取り運ぼうと決めた。夫人は朝まだき、朝課の時刻に起き出すと、伯に自分の服を一分の隙もなく着せた。このように姿を変えた伯は、婦人のふりをして市門へ向かつた。そばに付き添う伯夫人はなるだけ、できるだけそれとわからぬようにした。門に着くと夫人は番人に開門を求めた。番人は答えた。

「婦人よ、そうであれば、まずは王よりの指示を得ねば」

それを聞いて夫人は言つた。

「頼む、門番よ、わたくしがここで足止めされ、このあと一日の旅程をまつとうでなくなつたところで、あなたに一文の得もないではないか」

門番は、相手は婦人で、かつその本人が外へ出るものと思つて門をあけた。ところが出たのは伯。夫人は番人の目を避け、門の影に隠れて中に残つたので、最後まで伯は気づかれなかつた。

門を出た伯は別れの挨拶はもとより、いかなる言葉も発しなかつた。ひよつとして声で気づかれ、そのせいで自分と夫人の企てに支障が出るのを防ぐためであつた。それから伯は夫人の指示どおり、ある家の玄関へまつす

ぐ向かった。そこでは家臣であるあの二人の騎馬武者が馬一頭引いて待っていた。伯はそこまでくると、ただちにその用意の馬にまたがった。三人は進みはじめ、万が一にも気づかれぬよう用心しながら町を出ると、あと是一路軍勢の留まっている地点をめざし、ひたすら駆けた。ソモーサへ至ると、例の人々が待ち受けるあの森へ向かった。やがて一同の姿が望見されたとき、脱出してきた場所が場所なだけに、伯は心の底から安堵の吐息を漏らした。

伯の逃亡を知った王がいかに伯夫人に対したか。

ドン・サンチヨ王は伯の逃亡と、そのため夫人がいかなる手を用いたかを聞き、国を失ったにも等しい衝撃を受けた。だが、夫人に制裁を加えようとは考えなかった。王は頃合いを見計らって、夫人が夫と一夜を明かした宿所へ彼女を訪ねていった。そしてそこで夫人と膝を交えて話そうと、ともに椅子に掛けた。王は伯の逃亡について夫人に尋ねて言った、なにゆえこのようないそれた真似をしたのか、伯をここから逃がすなどとは、と。伯夫人は答えて言った。

「王よ、伯が苦しみに喘いでいるのを見かねたゆえ、覚悟を決めてここから逃がしたのだ。それにわたしにとって、首尾よくいく見込みがあれば、なすべきことでもあったのだ。加えて、あなたに無礼を働いたとはいえ、悪しきことをしたとは少しも思っておらぬ。わたくしは王女であり、ことのほか高貴な人の妻でもある。あるじよ、わたくしに対してはよき主人、よき王としてふるまわれよ。無体はしたまうべからず。わたくしはあなたの子息らと血の繋がりことのほか強き者にて、わが恥辱はあなたの大きな傷ともなろうかと。あなたは博学明智の人、最善の道をお選びあれ。人の謗りを受けぬようなされよ。わたくしが正しきふるまいしたからとて、悪しき目に遭うのは理不尽」

伯夫人が言いおえると、ドン・サンチヨ王は次のように答えた。

「伯夫人よ、あなたはあつばねなる働きをした。貞女の鑑というにふさわしい。あなたの働きは世々語り継がれていくであろう。わが家臣に命じ、総出であなたの供をさせよう。伯の居場所まで送らせ、あなたが今晚伯とすごせるようはからおう」

レオーンの人々は王命に従い、このうえなく高貴な婦人に対するにふさわしく、丁重しごくに伯夫人を送つていった。伯は妻の姿を見ておおいに喜び、これぞ天の恵みと感謝を捧げた。かくして伯は軍勢を引き連れ、夫人とともに伯領へ帰還した。

フェルナン・ゴンサレス伯が使者を送つて代金を請求し、王はそれにかえて伯領を譲渡する。

フェルナン・ゴンサレス伯はカステイリヤ伯の位に就いてからというものの、じつと落ち着いている暇がなかった。イスラム教徒どもやイスラム諸王、キリスト教徒の王らに平穩をかき乱されたのである。このたびも今述べたようなことがあつたが、その後レオーン王ドン・サンチョへ使者を送つて次のように伝えた、あなたはわたしから買った馬と鷹につき負債がある、これを返済なされよ、さもなければなんらかの抵<sup>かた</sup>当を出していた、だからねばなるまい、と。ドン・サンチョ王は伯に納得いく返答を与えなかった。そこで伯は全軍を召集し、集まつてきたところで出陣してレオーン王国へ攻め入ると、各地を荒らしまわつて人や家畜を多数連れ去つた。それを知つたドン・サンチョ王は、宮宰に巨額の金を持たせ、伯のもとへいつてそつくり渡してくるよう命じた。あわせて、思うにあのような借財に対し、あのような返済はしかるべき形ではあるまいゆえ、わが王国から持ち去つたものを残らず返すよう求めよとも。宮宰は伯のもとへいつて支払いを行なおうとした。しかし伯とともに計算してみたところ、一日ごとに返済金は倍という取り決めにより、それが膨大な額にのぼることが判明した、もはやスペインじゅうの人々が束になつても返しきれぬほどだ。それほど途方もなく膨れあがつていたのであつた。宮宰はむなしく帰るほかなかった。

報告を聞いた王は、こうした事態を前に立ち往生してしまった。そのとき、どこを見まわしてもよい知恵を貸してくれる者はなかった。以前の契約をもう一度結び直せるものなら、喜んでそうしたにちがいない。あの契約のせいで国を失いかねないと怖れたのである。契約が深刻な事態を招来、負債がいかにしても返しきれまいほど巨額になっているのを知った王は、家臣らと相談し、その結果、負債にかえて伯領を譲渡するということで意見がまとまった。王自身も後継の代々の王も、あの伯領からそれほど巨額な収益は見込めまいし、また伯領の人々との争いも絶えまいというのが理由であった。カステイリーヤ戦士とはそう思わせるほど誉れ高き勇者であり、かつ権利については一歩半歩も譲らぬ人々であった。この申し出が伯に対してなされ、王は負債にかえて伯領を差し出した。伯はそれを願ってもない話と考え、喜んで受けた。加えてこの取引により伯は安寧を手に入れた。深刻な外圧とは無縁になったと悟ったし、また律法の王すなわち教皇を除いて、もはやこの世の誰にも臣従せず済むであろうゆえであった。

ここに語られたようなしだい、カステイリーヤの人々は圧迫から隷従から、レオン王国やレオン人の軛から脱し(……)